

# 唯識經論に於ける般若思想

保 坂 玉 泉

## 一 解深密經中の般若思想

「解深密經」勝義諦相品第二には、真如無為法を説くに四段に分ち、如理請問菩薩、法湧菩薩、善清淨慧菩薩、善現菩薩の四菩薩の夫々に対説しているのは、「大般若」三九八卷・三九九卷や「小品」二七卷などの説相に酷似していて、それから引用集約したものであることは想像に難くない。

無自性品第五の三無自性説は、地波羅蜜多品第七「般若波羅蜜の無自性」とあるように、「般若經」思想の全面的繼承であり、次で最後段の有空中三時教の説は、「阿含」の有教、「般若」の無自性皆空の教をば、この「解深密」の中道教もて統一批判したもので、従来の仏教を一応完成したことを自認自証して、仏教經典思想史の弁証法的觀方の代表的なものとせられている。

分別瑜伽品第六に説かれた十七空相は、「大般若」三九八卷常啼品七七の二十空や同四百八十三の十六空と大同小異で

ある。

地波羅蜜多品第七は専ら菩薩の十地を説くところであるから自ら六度十度が順説せられ、般若波羅蜜が当然挙げられている。

尚「瑜伽論」七十五卷から七十九卷に至る五卷の中に復次に勝義諦に五相あり……解深密經の中の如し

というて「解深密經」四卷七品の全文を引用して、**「深密」「瑜伽」の成立に肝要な示唆を与えている。**

## 二 解深密經の成立と般若經

かく本經の各巻各品に「般若經」の文句並に思想多量に引用繼承させるのみならず、本經の組織が「般若經」を一環とし前提として構造せられ、「般若經」なくしては本經は成立し得なかつた、（これは他の大乘經との通例に依るものだが）特に經典思想成立史的に見れば般若皆空無自性觀を止揚して唯識中道觀が成立することを得、反之、空無自性觀がなければ

ば唯識観は現われ得なかつたというほどに両經は密接不離の關係又反対々當の關係に立っている。この見地から、「解深密經」の成立は「般若經」嚴密には「小品般若」以後なることは一目瞭然である。因に本經は「十地」、「華嚴」以後の出であることも明かである。

### 三 瑜伽の般若の方便行

「瑜伽論」卷三十七本地分中菩薩地第十五初持瑜伽処威力品第五に般若の威力の四相を出している。即ち

- 1、無明を断する力
- 2、四摂法を以て有情を成熟する力
- 3、歡喜を引いて自ら饒益し、理に称い法に称うて他を饒益する力
- 4、善根を摂し所作を正して、二障の離繫を証する力である。

同卷三十八同処菩提品第七に「菩提とは二断二智なり」とし、

二断とは煩惱障断・所知障断なり。二智とは一切煩惱隨縛せざる知・一切所知を礙ゆる無き智・清淨智、一切智、無滞智なり

とあり。この中後の三智は第二智の別名である。二断と二智とは表裏する、煩惱障を断じて得る所の智を一切煩惱隨縛せ

ざる知と謂い、所知障を断じて得る所の知を一切所知を礙ゆる無き知という。

同卷四十同処戒品第十の一に菩薩淨戒を受けた後爾時、十方の諸仏菩薩は、是の菩薩（受戒の菩薩）の法爾の相に於いて憶念を生起し、憶念に由るが故に正智見轉じ、正智見にてより如実に覺知す

というて、戒を以て般若如実智見の前加行とした。畢竟六波羅蜜（度）組織に於て前五波羅蜜を般若（慧）波羅蜜の方便行と見たものである。

### 四 瑜伽の慧の九相

「瑜伽論」卷四十三同処慧品第十四には、本色に菩薩慧波羅蜜多を説く九門を以てし、慧の九種の相を細説している。

曰く、

- 1、自性慧。一切の所知に悟入し、一切五明処を縁じて轉ず
- 2、一切慧。二種の慧、世間慧、出世間慧。三種の慧、(一)所知の真実を隨覺する通達慧、(二)五明及三聚を決定する通達慧、(三)一切有情の義利を作す饒益有情慧。
- 3、難慧三種、(一)難行慧 法無我を知る智、(二)有情調伏の方便を了する智、(三)所知の境界を了知する無障礙智。
- 4、一切門慧四種、(一)聞所成慧、(二)思所成慧、(三)思抃力所

撰慧、(四)修習力所撰慧。

5、善士慧五種、(一)正法を聴聞して集成する所の慧、(二)内の正しき作意と俱行する慧、(三)自他利行と俱行する慧、(四)諸法の法立法安立を善く決定する慧、(五)煩惱を捨する慧。

6、一切種慧、六種七種合十三種、苦・集・滅・道の智と尽智・無生智との六慧、法智・類智・世俗智・神通智・相智・十力前行智・四道理(四諦)の中の正道理智の七慧。

7、遂求慧八種、法無礙慧、義無礙慧、詞無礙慧、弁無礙慧、摧伏他論慧、成立自論慧、家産訓營慧、解工務慧。

8、此世他世樂慧、九種(細目を略す)

9、清淨慧、十種(細目を略す)

慧(般若)波羅蜜多の九種数十種類は従来大小三乗の般若思想の尽究的集大成である。之を資料として般若思想の発達史をトすることも出来よう。

## 五 瑜伽の第六現前地

「瑜伽論」卷四十八瑜伽処住(十地)品第四ノ二、第六現前地を説くところに、「云何んが菩薩の縁起相応する増上慧(般若波羅蜜多)住なる」の問に対し「十種の法平等性」、「三解脱門」を挙げ答えた後、

是の如く、菩薩此の住の中に住して無着智現前するを、般若波羅蜜多住現前すと名づく

次いで

般若波羅蜜多住現前して能く菩提を引き衆縁を引く

又次に

是の如く菩薩の方便般若智の随逐する所、能く空三摩地に入る

終りに、

当に知るべし、是れを略して菩薩の縁起相応する増上慧住を説くと名くと。……方便して生死を撰受するが故に無着地現前し般若波羅蜜多住現前するが故に……十地經の現前地に於けるが如し、此地の中に無着地現前し、般若波羅蜜多住現前するが故に現前地と名づく。

是等の諸文を合考すると、第六現前地の起原を明かにしている。元来十地思想は六度思想が「大品般若」と結付いて集成し、「十地經」に至って大成したものである(拙者論文・駒沢大学研究紀要第十三号「波羅蜜の展開と大乘經典の成立」参照)。而して第六現前地は第六般若波羅蜜多住にして、此地に於いては十二因縁但是心作と説き、これを後の「華嚴經」の「三界唯一心」「深密」の「識所縁唯識所現」の原本根拠とし、唯識縁起論が發生した。斯くして般若と唯識との関係が成立し、般若智慧の現前即ち六度行果の覺さとしとは三界唯心万

法唯識を内容とすることが明かになった。之を仏陀八相成道に照合すれば、第六現前地は樹下成道に相当し、樹下成道で仏は三界唯心外無法を悟られたということになる。

されば、「瑜伽論」卷五十菩薩地第十五瑜伽伽陀建立品第五ノ二に前記般若を無顛倒智、一切種智、如来の妙智と名づけ、総合して一切妙智と名づくといひ結んでいる。

## 六 瑜伽の五事三無自性

「瑜伽論」卷七十二、撰決拈分中菩薩地の一には「真実義品」を決する中、相・名・分別・真如・正智の五事を出だす。

同卷七十三・菩薩地の二に

問う、世尊は何の密意に依って一切法は皆二あること無しと説きたまえるや、答う、即ち、是の如く説く所の五事に依り（世）俗の自性に由って無自性なりと説き、別々の相（五事）に由って有自性なりと説きたまえり。

有自性も無自性も五事に依りて説きたまうという。

復た次に

問う、世尊は何の密意に依りて一切の法は皆無自性なりと説きたまえるや、答う、彼々の所化の勢力に依るが故に三種の無自性を説きたまえり、一には相無自性性、二には生無自性性、三には勝義無自性性なり。

三無自性を挙げた。

復た次に

此の中の五事は相無自性性に由るが故に無自性なりと説くに非ず、然も、生無自性性に由るが故に、勝義無自性性なるが故に、その所応に随って無自性なりと説くなり、謂く、相と名と分別と正智とは皆二様の無自性性に由り、真如は無自性性に由らずして無自性なりと説くなり。

五事と三無自性との關係を明かす。

復た次に

問う、世尊は何の密意に依って一切法は生無く滅無く本来寂靜にして自性涅槃なりと説きたまえるや、答う、相無自性性に依って是の如き言を説きたまえり

と謂うて次第に問答を進めている、即ち

一切法虚空に等しの説は、相無自性性に依り、

一切法如幻の説は、生・勝義の二に依り

五蘊無常の説は、相無性に依り

五蘊苦の説は、生・勝義の二に依り

五蘊空の説は、生・勝義の二に依り

五蘊無我の説は、生・勝義の二に依り

五蘊遍計性の説は相無自性に依り

五蘊依他性の説は生・勝義に依りて説きたまえり

とす。要之、茲には仏説の總該を挙げ、各みな三無自性に依る所以を明かにした。即ち一切法無生無滅本来寂靜自性涅槃

の説、一切法等虚空の説、一切法如幻の説、五蘊の無常、苦、空、無我の説、五蘊遍・依性の説は、仏陀の真説を総撰したもので、これらは皆三無自性説に依るとした。而して三無自性とは般若波羅蜜であるから、結局、一切法有の教を一切皆空（般若）へ皈入せしめ、遍依円の三性説を相生勝義の三無自性説へと飛躍せしめ、般若無自性皆空の教をうち樹てたものである。

此の説相は「解深密経」一切法相品第四から無自性相品第五への説相と吻合するものと思う。殊に「一切法無生無滅本來寂靜自性涅槃」の語は「深密」以来繰返された金文である。

## 七 瑜伽の三自性の解釈七門

次に三自性を解釈する第一嘔柁南あり、七門を開く、第一總拳門に曰う

云何んが名けて三種の自性と為す、一には遍計所執の自性、二には依他起の自性、三には円成実の自性あり。と名目を出だし、次で問答を設けて三自性觀の發生を解説している。

問う、遍計所執の自性は何に縁って応に知るべきや、答う、相と名と相屬するに縁って応に知るべし。  
問う、依他起の自性は何に縁って応に知るべきや、答う、遍計所執の自性の縁に縁って応に知るべし。

問う、円成実の自性は何に縁って応に知るべきや、答う、遍計所執の自性は依他起の自性の中に於て畢竟不実なるに縁る。応に知るべし、世尊は余経の中に於いて、遍計所執の自性に執着（雜染）せざるに縁って応に此の性（円成実自性）を知るべしと説きたまえるは、清淨なることを得る（遍計に執着せざる）に依つて説きたまい、相に依つて説きたまわず、今此瑜伽の義の中には当に知るべし相に依つて説くと。

斯文の後段に於て三自性説の従來の二義を比較している点は注意を要する。之に就て、「世尊は余経の中云々」は何経を指すか、仮りに「阿毘達磨經」の文を出してみよう、

阿毘達磨大乘經中薄伽梵説、法有三種、一雜染分、二清淨分、三彼二分、於依他起自性中遍計所執自性は雜染分、円成実自性は清淨分、即依他起是彼二分（撰論所知相分第三引）

とある、此の文によれば、依他起性の中に雜染・清淨の二分がある。依他起性に染執を起すを遍計所執といい、依他起性に執着せざるを円成実自性という、換言すれば因縁縁起性のものをそのままに見れば円成実性となり、非因縁性なりと見れば遍計所執となる、存在に対する見方の相異に依つて三自性説が興つたというのである。此説は「余経中」の説と同型である。

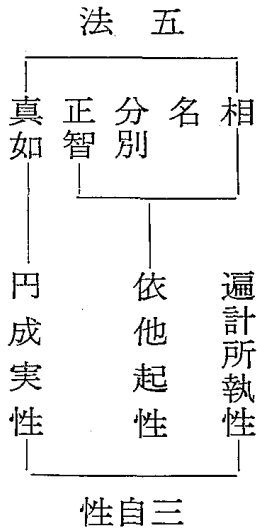
瑜伽従来の三性説は「深密」に由来して三相對立各別説であるが、「阿毘達磨」の三性説は同体異分説といふべく、かくして吾人は唯識三自性説に深密・阿毘達磨の二流ありと認めざるを得ない、此二源流が後の瑜伽系撰論系の唯識の流派を誘起したと主張して憚らぬ。

### 八 瑜伽の三自性を解釈する九門

「瑜伽論」卷七十四・撰決択分中菩薩地の三に三自性を解釈する喞陀南は九門を建つ。  
その第一撰門に曰く、

問う、三種の自性と相等の五法と、初の自性(遍計所執)は五法の中、幾ばくの所撰ぞや、答う、都ての所撰にあらず。問う、第二の自性(依他起)は幾ばくの所撰ぞや、答う、四(相・名・分別・正智)の所撰なり。問う、第三の自性(円成実)は幾ばくの所撰ぞや、答う、一(真如)の所撰なり。

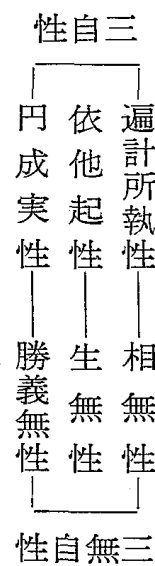
と。之を図解すれば次の如くである。



次に九門の第二無性門に

復次に三種の自性は三種の無自性性なり

というて三自性三無自性を各別に配当している、即ち



で、三自性説三無自性説が各々相反而立、正反關係にありと

右三自性説に次で三無自性説を出だし、且つ相反而立とするこの瑜伽の説き方は、「解深密經」一切法相品第四、次の無自性相品第五の説き方に一致し、後の「唯識三十頌」第二十二頌より第二十五頌に至る五頌の説き方を引き起し、「深密」、「瑜伽」、「唯識」三者系統して一切法無自性の般若波羅密に皈結するところは注意に値する。

尚、「撰論」所知相分第三の所引の「阿毘達磨經」の断片も三自性三無自性を般若へ皈結しているところを見ると無自性の般若波羅密は一貫せる真仏説と断定してよからう。

### 九 瑜伽中の解深密經の全文

「瑜伽論」卷七十五・撰決択分中菩薩地の四に「復次に慧波羅蜜多に五清淨あり」というて、その名義を列挙している。

- 1、諸法に通達する清淨

- 2、縁起に通達する清淨
- 3、教導に通達する清淨
- 4、士用に通達する清淨
- 5、証得に通達する清淨

般若の功用広大なることを示した。

同論卷七十五・菩薩地の四には「復次に勝義諦に五相あり

……解深密經の中の如し」というて、同卷七十九に至る間に、「解深密經」五卷八品の中序品を除く勝義諦相品第二、心意識一切法相品第四、無自性相品第五、分別瑜伽品第六、地波羅蜜多品第七、如来成事品第八の全文を挙げている。

「瑜伽」の撰決択分は本地分十七地を決択するものでその内容は十七地の略撰で簡略ながら諸問題を重説再説して同時にその諸問題の仏説典拠を明かにしたもので、今「解深密經」を全文挙げて「瑜伽論」の所依を証し、唯識の伝統を正したことになる。

中に於いて般若波羅蜜多に就て

世尊よ、菩薩は何等の波羅蜜多を以て一切法の無自性を取るや

との問に対し

善男子よ、般若波羅蜜多を以て能く諸法の無自性性を取る  
と答え、次で前文を解して

然るに無自性性は諸の文字を離るる自内の所証なり、言説

文字を捨てて而も能く宣説すべからず、是故に、我れ、般若波羅蜜多は能く諸法の無自性性を取ると説く  
という解深以来の無自性の般若波羅蜜多は離言説の般若波羅蜜多なることを明かにした。

## 十 瑜伽の空思想

「瑜伽論」卷九十・撰事分裂經事処撰第二の二に空の義に就て

復次に空に二種あり、一には有為、二には無為なり、此中、有為空は常恒に久久安住して変易せざる法及び我我所無きなり。若しくは諸の無為は唯だ空にして我及び我所あること無し。又此の空性は諸の因縁を離れたる法性の所撰なり、法爾道理を所依趣と為す。或は是の如く、或は異り、或は非なり、一切処に徧じて同じく法爾道理に皈せざるなり。

というて、空性を二種乃至四句に分別した。同卷九十二・契經事処撰第二の四空を解する段には、數論の作者受者の空なること、薩婆多部の三世実有法体恒有の空なること、我常論者等を破(空)している。即ち、我法二有(実我実法)の執を破している。空とは破邪なりとした。

## 十一 阿毘達磨經の三自性三無性説

「阿毘達磨經」は古來未渡未翻であるが、「撰大乘論」及びその他に本經の断片が引用されている。今日まで発見された断片凡そ十四種ほどあるが、中に於て、三自性三無自性に關するものが比較的多い。以下それを拾つて見よう。

「撰大乘論本」卷中・所知相分第三に

世尊の言うが如し、若し諸の菩薩四法を成就すれば、能く隨つて一切唯だ識のみにして都て義あること無き（理）に悟入せん。一には相違識相の智を成就す、餓鬼・傍生及び諸天の如き、同じく一事に於いて彼の所を見る識に差別あるが故に、二には所縁無きに現識を得べしとするの智を成就す、過去未來無影の如き、縁中所得ある故に、三には応に功用を離れ顛倒すること無かるべき智を成就す、有義の中の能く義を縁する識の如き、応に顛倒する無く功用に由らず智真実なるべきが故に、四には三種の勝智隨轉する妙智を成就す、何等をか三と為すや、一には心自在なることを得たる一切の菩薩にして静慮を得たるものは、勝解力に隨つて諸義をば顯現す、二には奢摩他修法觀を得たる者、纔に作意する時、諸義顯現す、三には已に無分別智を得たる者の無分別智現在前する時、一切の諸義皆顯現せず。という。此言は亦た「成唯識論」卷七の所引にして「述記」七末では、「阿毘達磨經」の文なりと指定している。尚、「撰論」は此文言に對し、

此所説の三種の勝智隨轉する妙智及び前の所説の三種の因縁に由りて諸の義無義なる道理成就す

と斷じて、此四智は總じて唯識無境の理を示すとし、兼ねて三自性三無自性説を説けるが如き口吻をもらしている。果せるかな「撰論」の次の文から三自性説を詳論し續いて三無自性説を出している。

尚、右四智唯識無境の説は後の「二十唯識論」の三界唯心唯識無境の説と照合していることは注意に値する。

「撰大乘論本」所知相分等三に

阿毘達磨大乘經中薄伽梵説きたまわく、法に三種有り、一雜染分、二清淨分、三彼二分なり。

依他起自性中、遍計所執自性はれ雜染分、円成実自性はれ清淨分、即ち依他起是れ彼二分なり。

譬えば世間の金土藏中三法の得可きが如し、一地界、一土、三金なり。地界中に於いて土は非実有なるも而も現に得可く、金は是れ実有にして而も不可得なるも、火燒鍊の時、土相現せず、金相顯現し、又此地界に土顯現する時虚妄顯現す、是故に地界は彼二分なり。

識も亦、是の如く、無分別の智火未燒の時此の識中に於ける所有の虚妄なる遍計所執自性顯現し、所有の真実なる円成実自性顯現せず。此識若し無分別智火の爲めに燒かるる時、此の識中に於ける所有の真実なる円成実自性顯現し、



所有の虚妄なる遍計所執自性顯現せず。是故に此虚妄分別識の依依自性には彼二分有り、金土藏中所有の地界の如し。

右の文意を図解すれば次の如くである。

┌ 雑染分 ─ 遍計所執自性 ─ 土 ─  
├ 清淨分 ─ 円成実自性 ─ 金 ─  
└ 彼二分 ─ 依他起自性 ─ 地界 ─

次に「同所知相分」第三に

幻等説於生、説無計所執、

若説四清淨、是謂円成実

自性と離垢、清淨道所縁

一切清淨法、皆四相所撰

宇井博士はその著「撰大乘論研究」四〇頁に此二頌を「阿毘達磨經」の断片なりと指摘した。

「同論」所知相分第三、及「大莊嚴論」卷五に無性自の二頌を引く、曰く、

自然自体無

見性不堅住

如執取不有

故許無自性

由無性故成

後後所依止

無生滅本寂  
自性般涅槃

宇井博士「撰論研究」四五二頁は「阿毘達磨經」の偈なりと指定す。

「阿毘達磨經」の無自性説の断片の発見は極めて少ない。

「撰論」増上慧学分第九には「復に多頌有り是の如き無分別智を成立す」というて次の多頌を出だす

鬼傍生人天 各隨其所応

等事心異故 許義非真実

於過去等事 夢二影像中

雖所縁非実 而境相成就

若義義性成 無無分別智

此若無仏果 証得不応理

得自在菩薩 由勝解力故

如欲地等成 得定者亦爾

成就簡択者 有智得定者

思惟一切法 如義皆顯現

無分別智行 諸義皆不現

当知無有義 由此亦無識

此頌は撰論所知相分第三菩薩四法成就文と頌長行の差こそあれ文意全同なれば阿毘達磨の頌文と推定する。

## 十二 撰論の無分別智

「撰大乘論本」卷中、所知相分第三に、諸の菩薩の十種の散動分別を列挙し、

此の十種の散動を対治せんが為めに、一切般若波羅蜜多（經）の中に無分別智を説く、是の如き所知能治は、応に知るべし、具に般若波羅蜜多の義に撰す

の文は「大般若經」卷四・學觀品、同卷四百二・觀照品、「大品」・習応品の文と一致す。

次に十種分別の説は「大莊嚴論」卷五・述求品第十二の十種対治説から引いたものであった。

「撰論」卷中、所知相分第三の

自然自体無 自性不堅住  
如執取不有 故許無自性  
由無性故成 後後所依止  
無生滅本寂 自性般涅槃

この二頌は「阿毘達磨經」の断片なること前説の如し、又「大莊嚴論」卷五・述求品十二の引用するところとなったが、遠く「解深密經」無自性相品第五・地波羅蜜多品第七から来ていることは明白で、この片鱗によって、「深密」「瑜伽」「阿毘達磨」「莊嚴」「撰論」の般若思想の系統の全貌を窺うことが出来、併せて是等諸經論の系統をも証することが容易であ

る。

## 十三 撰論の六度の三因

「撰論」卷中・彼入因果分第五・六度を立つる三因を出だす、即ち

何の因縁の故に波羅蜜多是唯だ六数なるのみなりや。（一）所治の障を対治することを成立するが故に、（二）諸仏の法の所依処を証するが故に、（三）随順して諸の有情を成熟するが故なり。

というて三因縁に依つて各六波羅蜜多を立つることを解説した。此文は「大莊嚴論」卷七度撰品十七の略説である。「莊嚴」は六度を立つる六因を出だしたものを今「撰論」は三因に略撰したもので、二論は唯だ広略の差あるのみで、文意全同である。之れによりて、「莊嚴」を継承したものが「撰論」である、結局、達く「阿毘達磨經」に依り、近く「莊嚴」を承けて出来たものが「撰大乘論」であることが明かである。尚、この事に就いては拙著唯識根本教理二六五頁・第七章撰大乘論所撰經論対照表に委しく証してある。

## 十四 撰論の般若慧学分

「撰論」卷下・増上慧学分第九はその名の如く専ら般若慧学分を全面的に論じている。撰論般若思想の中心である。茲

には総別に無分別智（般若波羅蜜多）を挙説し、無分別智の自性、成立の相、種類即ち加行無分別智の三種、根本無分別智の三種、後得無分別智の五種、無分別智を成立する因縁、無分別智即ち般若波羅蜜多なること、声聞の智と菩薩の智との五相の差別を委細に挙説し、因に三学成就の菩薩財施せざる因縁を説いている。

此の中、

如末尼天樂 無思成自事

種々仏事成 常離思亦爾

の頌は、「大莊嚴論」卷三・菩提品十の

意珠及天鼓 自然成自事

仏化及仏説 無思亦如此

の頌と同じ。

「復た多くの頌ありて是の如き無分別智を成立す」として

鬼傍生人天 各隨其所応

等事心異故 許義非真實

於過去事等 夢像二影中

雖所縁非真 而境相成就

若義義性成 無無分別智

此若無仏果 証得不道理

得自在菩薩 由勝解力故

如欲地等成 得成者亦爾

成就簡括者 有智得定者

思惟一切法 如義皆顯現

当知無有義 由此亦無識

を出だす。「唯識論述記」七末の指示によれば此頌はもと「阿毘達磨經」の頌なりという。頌意は一水四見三世法、夢影等の外境の成ずるは無分別智なきが故で菩薩の勝解力、仏果の智定の無分別智にて唯識無境亦た無識を証するとした。無分別智により心境俱空に悟入するというわけである。此の説き方は後の「二十唯識論」の三界唯心、心外無境の説き方と呼応するものがある。

次に、般若波羅蜜多即ち無分別智なりとして、

般若波羅蜜多と無分別智と差別有ること無し、説けるが如し、菩薩、般若波羅蜜多に安住し、非処と相応し、能く所

余の波羅蜜多に於いて修習円満す

此中、「説けるが如し」とは魏訳「撰論」の指示によれば「大品般若」の文なりとしている。尚、非処と相応し修習円満する五種の相を左の如く挙げてゐる。

一には外道の我執の処を遠離するが故に、

二には未だ真如を見ざる菩薩の分別する処を遠離するが故に、

に、

三には生死涅槃の二辺の処を遠離するが故に、

四には唯だ煩惱障を断するのみにて喜足を生ずる処を遠離

するが故に、

五には有情の利益安樂を顧みずして無余依涅槃界に住する處を遠離するが故なり。

である。

## 十五 撰論と中論

「撰大乘論」の著者無着には「順中論」の著あり、これ竜樹の「中論」の般若思想を継承したから、自著独創の「撰論」の般若思想が「中論」の影響を承けたことは疑われない。即ち彼の般若思想は実相縁起の二系の般若思想を持っていると思う。竜樹の般若中道は心境俱空心境不二の中道論理に依り、唯識の中道は心有境空、非有非空の中道論理に由る。前記般若無分別智に唯識無境を説き、無識無境心境俱空を説く文を引いているのは実相縁起の二大対立を融和している如くである。

## 十六 総括

唯識諸經論は「解深密經」「瑜伽師地論」の系統と「阿毘達磨經」「大莊嚴論」「撰大乘論」の系統との二大系統相並んで「唯識論」に及んだ（唯識根本教理二九七頁第二節唯識諸經論の系統参照）ことは前来の研究で一層明徴になった。

就中、般若思想の研究については諸經論一貫して実相般若

と觀照般若とを各別の問題として取扱っていることが判然した。これが本研究の新所得であった。乃ち実相般若の説相は「解深密經」の勝義諦相品、一切法相品、無自性相品の内容三性三無性の説、「瑜伽論」各処の三自性三無自性の説、「阿毘達磨經」の三自性三無自性の説、「撰大乘論」の三自性三無自性の説は各々經論の伝承連系をなしている。次に觀照般若の説相は菩薩道十地の階位に於ける第六現前地の般若慧波羅蜜多の觀照の行相にして、有漏の分別智より無漏無分別智と証入するに就ての種々なる様相を説くものである。「解深密經」の分別瑜伽品、地波羅蜜多品の「瑜伽論」卷四十三のに於ける般若の説、卷四十八住品に於ける第六現前地（般若慧品に波羅蜜多住）の説、卷七十二・七十三・七十四・七十五を中心として五事法（無自性の般若波羅蜜）の説、「阿毘達磨經」の二所知相殊勝殊勝語の中の菩薩成就四法の第四三種智隨轉妙智、八増上慧殊勝殊勝語の中の無分別智の頌、「撰大乘論」は「阿毘達磨經」「大莊嚴論」を継承して慧波羅蜜多を諸処に拡充している等、同じく系統的に伝承して余蘊ない。